



TITLE:

〈追憶文〉 田中真晴先生の業績を  
偲ぶ

AUTHOR(S):

松嶋, 敦茂; 梅澤, 直樹

---

CITATION:

松嶋, 敦茂 ...[et al]. 〈追憶文〉 田中真晴先生の業績を偲ぶ. 経済論叢  
2000, 166(4): 86-90

ISSUE DATE:

2000-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/45380>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 166 卷 第 4 号

---

哀 辞

故田中真晴名誉教授遺影および略歴

カール・クニースの経済学講義……………八 木 紀一郎 1

ごみ処理広域化に関する政策史分析（1）……………八 木 信 一 27

1949年ドイツ・マルク切り下げ問題をめぐる

米仏関係……………河 崎 信 樹 43

ヴェルテンベルクにおける編物産業内の

社会的分業の展開（2）……………森 良 次 59

日中戦争期におけるアメリカの対華支援（1）…大 石 恵 73

追 憶 文

田中真晴先生の業績を偲ぶ……………松 嶋 敦 茂 86  
梅 澤 直 樹

弔辞……………田 中 秀 夫 91

---

平成12年10月

京 都 大 学 経 済 学 会

〈追憶文〉

## 田中真晴先生の業績を偲ぶ

松 嶋 敦 茂  
梅 澤 直 樹

田中真晴先生は、『ロシア経済思想史』（ミネルヴァ書房）の著者としてつとに学界に名を知らしめられ、また後年には F. A. ハイエクの経済思想の要諦を知るうえで何よりの手引きと目されるアンソロジー『市場・知識・自由』（ミネルヴァ書房）を編訳された。そのお仕事の魅力は、これらの業績からもうかがわれるとおり、丹念に培われた幅広く、豊かな学識・教養のうえにまさに後述のウェーバー的「文化人」の手によって誠実に結晶化された珠玉の作品として、それが備える信頼感になにより求められよう。

こうした先生のお仕事の特徴は、残念ながら遺著となってしまった『ウェーバー研究の諸論点』（未来社）にも明らかである。同書は、先生が長年に亘って発表されてきた諸論文のうち晩年まで愛着を抱かれてきたものをもって編まれた論文集である。第一部は方法論、農政論、ロシア論、貨幣論に関わるウェーバー研究の5論文によって構成され、第二部にはマルクス経済学の原理的研究に属する貨幣論、死という実存的問題を切り口とした A. スミスと D. ヒュームの思想の検証、あるいは経済学雑誌を主たる素材とするという興味深い手法で追った19世紀末のイギリス経済学界の展望という多彩な諸論文とともに、先生の来し方をソ連崩壊の翌年という時点であらためて振り返りつつ、社会科学研究者・教育者の思想責任について問題を提起した学会報告（経済学史学会関西西部会）が配されている。スミス＝ヒューム論の基底に存するストア学派に対する造詣を想起すればなおのこと、先生がじつに幅の広い経済学史家、経済思想史家であったことが偲ばれよう。と同時に、「社会科学の根っこには思想がある」と考え、「個人の思想的主体性、研究者の市民社会的個人としての責任の確立」を求めて、敢えていわば自らを切開・解剖しつつ社会科学研究者・教育者の思想責任について問題提起された学会報告からは、戦後日本の社会科学を牽引した市民社会派、とくに丸山真男、内田義彦から深い影響を受けられた誠実な学徒としての先生の肉声が響く思いがする。

なかでも、同書の冒頭を飾る「因果性問題を中心とするウェーバー方法論の研究」は、先生のお仕事のこうした特徴が先生の実証者としての出発点に根ざすものであることを

よく伝えていて印象深い。同論文は、先生が大学院生時代に書かれた処女論文であり、まず『経済論叢』に発表され、その後安藤英治他編『マックス・ウェーバーの思想像』（新泉社）に収録された。ウェーバーの因果性理解の特質を切れ味鋭く解析してゆくことによって、因果性理論がウェーバー方法論の中核的ないし底礎的理論であることを明らかにするとともに、その影塚が後期ウェーバーの著作の内容にどのように反映しているかを鮮やかに描出してみせた秀逸なウェーバー論である。とともに、ウェーバーの因果認識が当初から具体的因果連関にこだわり、経験的に論証しうる地盤で問題を取り扱おうとしていたものであったことへの、換言すれば歴史学派を支配した法則的必然性としての発展段階説的公式指向で事足りりとするものではなかったことへの共感からは、たとえば弁証法というマジックワードで超越的になんともわかった気持ちになっってしまうことを嫌い、広範で丹念な探究に基づいて手堅い論議の積み重ねを図ろうとされた先生の学風がうかがえる。この点はまた、議論の徹底性におおいに啓発されつつも、そこに教条主義的偏向の危うさをもみてとられた後年のハイレク評価にも通じていよう。さらに、末節の「文化科学的認識は主観的前提に結びつけられている」というウェーバーの命題に関連して繰り広げられた考察においては、「『没価値性要請』を自己の政治的立場の曖昧性をかくす無花果の葉として使用する」ような没価値性理論の通俗的解釈を厳に戒めて、「意識的に世界に対して態度を取り、かつこれに意味を与える能力と意志とを具え」ているという意味で、ないし「現実に対して、生々たる問いの意識を失わない」という意味でウェーバーの言う「文化人」であることこそが、社会学者の条件であるという問題に焦点が合わされていた。これがうえに触れた学会報告に直結するものであり、そうしたものとして出立から晩年まで先生のお仕事を貫くライトモチーフであったこと、もはや言を重ねるまでもあるまい。

だからまた、先生にとり、若い頃に書かれたマルクス経済学概説がマルクスとの間に一定の距離を保てず、白らの知的誠実にもかげりを生じさせたという想いは、苦く重かった。こうして、ロシアにおけるマルクス主義の研究に向かわれたさいには、レーニンの著作によりレーニンの時代をつかんだうえでレーニンの理論をもってきてその現実認識の正しさを確認するという、陥りがちなトートロジーをなんとしても避けるべく、ロシア語を学び始め、レーニン以外の現実認識との対比のうちにレーニンを置くことに乗り出された。その成果が1967年に公刊された主著『ロシア経済思想史の研究』である。

同書に関しては、先生が30年近くにわたって主宰された方法論研究会のメンバーであ

り、今やロシア経済思想史研究の中核を担う研究者の一人である小島修一氏がロシア研究会のニューズレターに寄せられた追悼文が既にあるので、その一節を以下に引用させていただこう。すなわち、同書は「19世紀末のロシア資本主義論争をブレハーフを中心にして体系的に解明したもので、当時ほとんど知られていなかったダニエリソン、ヴォロソフ、ストルーヴェ、トッガン＝バラノフスキーの経済思想にも詳細な検討を加えている。またそこでは、西ヨーロッパの経済学史、社会思想史に関する先生の該博な知識が総動員されており、マルクスはもとよりスミス、リスト、ウェーバーへの言及が数多く見られる。おそらくロシア資本主義論争に関して、これほど包括的で高い水準の研究は、欧米諸国でもまだ現れていないのではないか」。さらに、同書は、「当時の若手研究者に大きな知的刺激を与えた」のみならず、「刊行後30年以上たった今日でも、研究者にとって学問的な輝きを失わない必読文献の一つとなっている」と。

同書を完成されたあと、いくつかの事情が重なって先生は経済原論講座を担当されるようになり、さらに精一杯誠実に対応しようとされた学内の紛争にも疲れられて1974年に甲南大学へと転出された。そして、上述の学会報告での言葉を借りれば、「自分自身を確かめるために」スミス、ロック、ホッブズなどを再び読み始められた。高校時代からなんとなくカントに憧れられ、したがって新カント派の認識論やウェーバー研究に親しむ一方で、敗戦直後の時代の空気の中で、ウェーバーにはない経済理論を、それも相当の迫力を認めうるそれを備えたマルクスに出会われた先生は、「歴史としての現在の把握と経済学においては」マルクスに傾いてゆかれたのであったが、種々の重い内的、外的経験を経てここであらためていわば無理のない自己への回帰を図られたと言ってもよいであろう。それはまた、先生の裾野の広い、豊かな学識・教養の基盤を構成しているのがウェーバー的な世界、ないしそれと通じるスミスやJ.S.ミルを貫流するイギリスのいわば地に足のついたリベラリズムの世界であることを確かめられる営みでもあった。こうして先生は、マーシャル研究へと向かわれた。さらに、現代に生きる経済学史家、経済思想史家として古典研究を補完すべく読み漁られたJ.K.ガルブレイス、M.フリードマン、K.ポールディング、エコロジストの諸書などのなかで、true individualism を掲げたハイエクにとくに興味を抱かれることともなっていた。

このリベラリズム研究は、冒頭で触れた『市場・知識・自由』を生み出すとともに、編著『自由主義経済思想の比較研究』（名古屋大学出版会）の序章をなす晩年の力作「自由主義の経済思想序説」として結実をみた。同論文は、旧社会主義国における年金

の実状を引きつつ、「効率あつての福祉である。自由主義の原理は基本的人権の実質を守り、高めるためにも、おろそかにされてはならない」と結ばれている。だがそれは、福祉国家政策が弊害、したがって手際の悪さを伴いつつも、長期的視野で評価すれば相当な善を達成したと信じる、L. ロビンズに共感を示されてのうえでのことであつた。また、ハイエク思想の解説にあたつて、究極的価値の多元性とその闘争に暗く彩られ、人格の尊厳とか内面的自由を問うがゆえに合理化過程を人間疎外をも伴う近代の「宿命」とうけとめるウェーバーの世界と対比し、ハイエクの思想世界は二元的対立を原理とし、本質的に明るいと特徴づけながら、先生はウェーバー的世界に捨て難い共感を示されていた。先生のリベラリズムを理解するうえで逸しえない点であろう。

うえのようないわば無理のない自己への回帰の旅は、「マルクス経済学はどうしても身につかない」という経済原論講座を担当されての先生の実感の底に横たわっていた直観、すなわち「人間性の理解においてマルクスには無理がありすぎる」という直観を確かめられる旅でもあつたわけだが、先生がマルクス経済学に感じられたなじみきれなさはその理論構造に関わつてもいた。たとえば、先生はそもそも若い頃から労働価値説に一定の無理をみてとられていたのである。とはいえ、空想性から脱却してそれに照応したカテゴリーの意味変化を聞き、また発想法における形而上学的要素を抜き去ることを果たすなら、マルクス経済学はなお相当に強力な概念装置として、とりわけひろい意味での制度派経済学に通じる側面において、力を発揮しうるであろうとも評価されていた。こうして先生は、経済原論講座担当時、現代的情况を見据え、経験的に論証しうる地盤で問題を取り扱うという、研究者生活の出立点以来の、かつまたうえの旅を誘発し、それを貫いた先生本来の姿勢を実践しながら、マルクス経済学の再構築に取り組まれた。だが、その道は先生にとつても決して容易なものではなかつた。

すなわち、この道において先生がさしあたり共感を抱かれたのは宇野弘蔵のマルクス経済学研究であつた。じっさい、ともすれば単なる解釈論に堕しがちであつた日本のマルクス経済学研究のなかで、宇野のそれは、『資本論』であっても自ら採りえないところは思いきつて改作する点で異彩を放つていた。つまり、護教的解釈学としてでなく、論理的整合性のみを問うたものとして、先生の基本姿勢と相通じるところをもつていた。かつ、その改作も先生を惹きつけるだけのインパクトを備えていた。だが、三段階論という独自の方法論の下で現実から隔てられて閉じた理論空間を形成する原理論は、やはり先生の求められたところではなかつた。

そうしたなか生み出された成果が、既述の遺著に収録された「貨幣生成の論理」である。同じく同書に収録されている「ウェーバーの貨幣論」も、現代の管理通貨制度を射程に、マルクスの貨幣論のなにを整理し、なにをどう生かすべきかを、ひとまずウェーバーの貨幣論に内在しながら視野広くかつ緻密に考察されようとした、教えられるところの多い興味深い労作であるが、「貨幣生成の論理」はそれを前提に、マルクスの価値形態論を再構成された。第Ⅱ形態から第Ⅲ形態への移行に関してマルクスが遺したアポリアに、ウェーバーの理解の方法を駆使してまさに経験的に論証しうる地盤で一步一步緻密に迫られた力作である。管理通貨制度を包摂しうる論理展開を目指されている点にも注目したい。と同時に、先生は、書き上げてみて、マルクスの価値形態論から形而上学的要素を排除して再構成すれば、マルクス説はメンガーやスミスの貨幣生成論と十分に対話可能なもの、同質的なものとなることがわかったと述べられている。ここでも先生は、「スミスからマルクスへではなく、むしろマルクスからスミスへ」という境地へ到達されたわけである。

最後に、先生はスケールの大きな経済学の通史を構想されていた。私たちの知るところでも、トマス・アクィナスに関心を抱かれ、また晩年にはシェンペーター研究にエネルギーを注がれていた。さらに、先に触れた19世紀末のイギリス経済学界の展望論文も、本来は、いわば輪切りのかたちでこの時点での欧米諸国の経済思想を展望し、各国の状況とともに、経済思想の国際的流通についての見通しを得ようという試みの端緒となるはずのものであった。じっさい、同論文には、イギリスのみならず、アメリカ、ドイツ、オーストリア、フランス、イタリア、さらにロシアや日本までもにおける経済学会発足や経済雑誌発刊状況についての簡単なサーベイが含まれている。緻密で論理展開力にも秀でられていただけ白らの思考の穴にも敏感で、成稿を得るのにきわめて時間を要された先生であっただけに、もう少しご健在でおられたとしても、私たちが先生の通史を拝読できたかどうかは定かでない。だが、業績の蓄積が進んで専門の細分化がますます進行していく現代、本当に骨太の通史を描ける経済学史家、経済思想史家はきわめて少なくなった。先生は、視野広く、深く豊かな学識・教養を備えた、まさにそうした経済学史家、経済思想史家の一人であっただけに、もはやその通史を拝読することがかなわなくなってしまうことはなんとも惜しまれると思わざるをえない。